

ど), ソーマ (麻黄の圧搾液), 例外的に穀物酒 (スラー *sūrā*-, → サウトラーマニー祭)。人が cultivate するミルクと大麦の製品が中心であり, 野生動物, 蜜, 故麻などは献供の中心とはならない, cf. 「酸乳 (*dādhi*-) は村落に属する, 蜜は原野に属する」TS V 4,5,2。「神々は生のもの, 調理されていないもの(火の通っていないもの)は食さない」(br. 以降しばしば見られる表現)。

木製品 (→ 7.4.4.): 小枝 (仔牛を親牛から離す目的などに); 柄杓, 匙類, コップ類。焼き串, かき混ぜ棒, 掻き棒, 鋏, 鋤, 槌, 斧, 小刀, 火壺支え鉢。脱穀用臼と豎杵, ソーマ圧搾用の板道具。火起こし棒と台木。柱, 祭柱 (→ 21.)。椅子(草紐で座面)。荷車, 戦車 (SPARREBOOM, *Chariots in the Veda*, Leiden 1985, RAU, *Zur vedischen Altertumskunde*. Ak. Mainz 1983 参照)。

竹, 籐, 草など: 敷き草, 屋根: 箕, 火吹き筒, 団扇; 草箒; 椅子の座面, 各種の紐: 日傘。

陶器製品 (RAU, *Töpferei und Tongeschirr im vedischen Indien*, Ak. Mainz 1972 参照): 各種容器。パンケーキ焼成用陶片。移動用火鉢(ウカー *ukhā*-: 英語 *oven*, ドイツ語 *Ofen* に連なる印欧起源語)は移動生活期の遺風を伝え, 注目に値する。例外的にアグニチャヤナ (火壇構築祭) に焼成煉瓦 (インドではインダス文明の都市に用いられた以外, 知られない) が用いられる。煉瓦板は縁が重ならないように鷹の姿に五層に積み上げられるが, その方法を記すシュルバーストラ (→ 3.4.) は最古の幾何学書となった。

金属製品 (RAU, *Metalle und Metallgeräte im vedischen Indien*, Ak. Mainz 1974 参照): 鍋, 搾乳用バケツ。貴金属 (金, 銀) の装身具等。

石製品: ソーマ圧搾用の石, 粉ひき用の石板 + 握り石。

その他: 土の練り上げ炉 (火壇), 磔: クロカモシカの毛革 (潔斎用とソーマ圧搾用), 角 (潔斎用)。馬, 牛。

祖霊祭の規定には, 各種の肉料理が言及される。胡麻, 蜂蜜の使用も目を引く。プージャー等における供え物については → 10。



STAAL, *Agni I*, p. 327 から: 潔斎 (dīkṣā) 中の祭主。東面してマントラを唱えている。杖 (木の枝) を持ち, ターバン (*uṣṇīṣa*-) を巻き, 黒羚羊の毛皮を右腕に掛け, 頸からは金 (または銀) の円盤 (*rukṁā*-) を下げている。祭主と紐で結ばれた椅子の上に火鉢 (*ukhā*-) が置かれ, 新たに鑽り出した祭火が燃えている。

【付録】

15. 動物犠牲祭 (*paśubandhā*-) 式次第

ソーマの圧搾の前日に行われるアグニとソーマに捧げられる犠牲祭が基準に採られているため, 挙行の期日はソーマ祭に依存する。スートラには, 独立の犠牲祭を行うべしとする規定が見られるものの, 中味は毎年, 半年ごとなど多様で, 期日についても一致を見ない。式の流れを SCHWAB (→ 7.4.2.) に従って列挙すると次のようになる:

第 1 部

Upavasatha 等: 祭柱 (*yúpa*-) にする樹木の選定, 伐採 - 祭場設営 - 祭火配置 etc.

第 2 部

手洗い, 祭火をつなぐ干し草の筋 (*ulaparāji*-)

を置く－祭具に水を掛ける－匙と木の篋を拭う
 －祭主夫人に帯を巻く－バター(オイル)と酸乳を鉢に満たす etc.－焚木と敷き草の束をほどき水を掛ける－献供用祭火の三方に結界の焚木(*paridhī-*)を置く－献供用バターをヴェーディ(→6.)の上に置く－祭柱(*yūpa-*)建立(…バターを塗る, 縄を巻き付ける…)－犠牲獣(*páśu-*)の用意(予め香料入り水で沐浴させてある)－祭火鑽り出し－犠牲獣に水をかける－祭火を燃え立たせる－犠牲獣を縛って祭柱に結びつける－ホートリ祭官の選定(*pravara-*, 家系の読み上げ), 神々の招待－二度のバター献供－犠牲獣にバターを塗る－他の祭官たちの選定

第3部

11 からなる前献供(→20., n. 6)の中1-10(バター *ájya-*): 1. 焚木, 2. *Tanūnapāt*, *Narāsaṁsa*, 3. *Agni-īdā*, 4. 敷き草, 5. 門たち, 6. 昼夜, 7. 神々の両ホートリ, 8. 三女神, 9. *Tvaṣṭar*, 10. *Vanaspati*「木々の主」－犠牲獣に火を巡らして浄化－「職人(=屠殺者, 解体者)の火」の設置－

「同意させる」(*saṁ-jñapayati*), すなわち, 屠殺: 祭柱から放して職人(*Samitar*「<*努め励む人」)に渡す, アドゥリグ *Adhrigu* の指示祝詞(→18.), 祭場の北で「納得・同意させる」(窒息させる)－

犠牲獣のための献供(*saṁjñaptahoma-*)－縄を解く－祭主夫人退席－祭主夫人が祭場東北の穴 *cātvāla* に水を注ぐ－「膨らませ」(獣の各部位に水を掛ける)－

アドヴァリユ祭官による *vapā-* 腸間膜(正確にはおそらく「大綱」)の取り出しと献供(*homa-*): 仰向けに寝かせ, 臍の右側に草をあてがった上から, 血が流れ出るまで切れ目を入れる, 切れ目を開いて腸間膜(大綱)を取り出す。「職人の火」で熱し太陽を崇める。串に刺して献供用祭火の隅で炙る; その上にバターをかける。下ろして串を抜く。第11前献供(*Agni*へバター *ájya-*)。献供(*homa-*: 腸間膜[大綱]

全部を火中に献供, *Indra* と *Agni* に捧げる)。祭場東北の穴 *cātvāla* (: 天界の入り口 [～夜の太陽?]) の所で一同洗い清め－

パンケーキ(*puroḍāśa-*)の献供－解体(*viśasana-*): 解体者, 命令者については学派, 文献間で一致を見ず (cf. アドゥリグの祝詞, 18.)。－

献供: 1. 心臓, 2. 舌, 3. 胸部(骨つき), 4. 肝臓, 5. 腎臓, 6. 脇部(背部), 7. 左前脚の大腿部(骨付き), 8. 右臀部(±骨), 9. 右前脚の大腿部, 10. 左臀部, 11. 直腸, 12. 右肺 *klomān-*, 13. 左肺 *purītāt-*, 14. 脾臓, 15. 脂(*médas-*, 心臓と腎臓の周りの脂肪), 16. 大腸, 17. *ādhyudhni-*, *ādhyuddhi-*「?」(cf. *ūdhar-śūdhan-*「乳房」), 18. 尾－

「職人の火」に鍋を掛け煮る(心臓は串に刺して炙り, 肉片が煮えたら串から外してその上に置き, 上から酸乳を混ぜたバターを注ぐ)－胃と排泄物を穴に埋める－パンケーキ(*puroḍāśa-*)の献供(締めくくり)－

切り取り(*avadānam*): 神格たちに捧げる親指の一関節大の切片(*daivatāni*)を各部の上下から(直腸と脂に関しては議論あり), 祭官たちが食する“*īdā*”(栄養)の部分－残余の部分(頭部 etc.)に触れる－脂分(*vāsā-*, *vasā-*: 煮汁の上部と肉片からの流出分)を掬い取る－

献供(マントラによると *Indra* と *Agni* へ, 「神格たちへの分」(*daivatāni*)と脂分, 金片を添えてバター[*ájya-*]を注いでから)－「木々の主」に対する酸乳を混ぜたバターの献供－「良き献供を為す」*Agni* への献供－

祭官たちが“*īdā*”を食す－11からなる後献供と副献供(後者は *Pratiprasthātar* による直腸の部分の献供)－匙類の片づけ－祭柱の削りかすと敷き草束 *prastara-* の「献供」－祭主夫人を伴った献供(尾の一部などを用いる)－祭官たちの二回目の“*īdā*”食－「終わりの祭詞」3 献供－心臓用の串の *udvāsana-*「旅に出ること, 定住地を離れること」(水と木の篋を用いて埋める)－祭柱礼拝(祭柱には触れるべからず)。

注目点：

1. 屠殺に先だってホートリ祭官が「アドゥリグの祝詞」という指示を出す。ここに古い犠牲祭の姿が推定される。リグヴェーダ-ホートリ系の「マイトラーヴァルウナ祭官」が登場し、指示を出す場面が多くある。
2. 献供に用いられるのはごく一部のみ、cf. 『アヴェスタ』 Nīrangistān 65: 二本の指で掴める量の、犠牲獣の右側の、あるいは、頭頂部の肉を、脂身から多くとる。全身献供 (cf. ギリシャ語 [聖書] *holokaútōma* ホロコースト) は RV X 90 「プルシャの歌」に言及される: *sarvahūt-*。ギリシャ語の副詞 *pán-k'u* 「全く、完全に」からギリシャにも同じ観念があったことが解る。腸間膜、大網だけはアドヴァリユ祭官が先だって扱うことから、本来は腸間膜・大網、脂身など、重要でない部分だけを献供した可能性がある。『アヴェスタ』、『レビ記』とも比較の必要。
3. 屠殺は献供の部分を得るのに不可避な行為という印象を与え、言及が避けられている: 実行する「職人」は祭官に属さない。「職人の火」の設置次第・場所は言及されない。屠殺は窒息によるが、記述は Br. では ŚB III 8,1,15 に僅かにあるのみ: 「[彼らは] 他ならぬ口を塞いで気を失わせる。あるいは締め縄を用いる」(Megasthenes の報告に一致する由)、「神々は傷ついたものを食べないから」(KB)。
4. 血は役割を演じない。アドゥリグの祝詞(→ 18.)の第8歌「毀損力を血と結合させよ」には忌避の観念が見られる。祭式ではダルバ草の茎を血に浸して捨てる。
5. 「神々は調理された(加熱された)ものを好む」(別の祭式で牛乳を熱することについて)。
6. Br. の議論には自己犠牲の観念が見られる: 犠牲獣は本来祭主自身であり、祭主は犠牲獣によって自らを買い戻す (*ātmaniṣkraya*), cf. Śunaḥśepa の物語 (AB, ŚāṅkhŚrSū)。
7. 穀物祭(新月祭・満月祭)との摺り合わせ、穀物(パンケーキ)による置き換え、後の所謂 “*piṇḍapaśu*” 「犠牲団子」による代置にも注意が必要。
8. 祭柱・樹木に関する事柄も注目される。→ RV 祭柱の歌 (21.)
9. 祭式の場以外での出来事には一切触れられず、共食、宴会は暗示さえされない。最古の散文文献 MS II 4,1:38,5 ~ KS XII10:172,9 には「それ故、大工には(犠牲獣の)頭が取っておかれる。それ故、彼(大工)の食物は食べてはならない」とあるが、MBhār V 9,36f. (cr. ed. 25) によって、棟梁が犠牲獣の頭部を貰う風習を言うものと解る(一般に誤訳されている)。棟梁は上位三階級(アーリヤ)と見なされないことにも注意。
10. アープリ-讃歌の配置と大網献供 (*vapāhoma*) から見ると、本来の犠牲祭は *vapā* 献供であり、後続の *daivatāni* の切り分けと献供はパンケーキの献供に合わせて拡大付加されたものとも考えられるか。
11. 主要神格はマントラから Indra と Agni と判断される。新月時の神格に標準が取られており、場合毎に入れ替えられるものと考えられる。満月時には Agni と Soma とが考えられる。Soma 祭等に組み込まれた犠牲祭、願望犠牲祭などでは、その都度神格が代わり、犠牲獣の種類、毛色、雌雄の指定も多様である。
16. 枝・草の切断と動植物の慰撫についての覚え書き
 1. 最も古い祭式用の祝詞を集成したものであるヤジュルヴェーダ・サンヒターの最初の祝詞は、「滋養(活力を与える飲み物)の為に君を」である。「仔牛を牝牛から離す為に用いる枝の切断にあたり、樹木に対する慰撫と、樹木を傷つける行為の正当化とを意図するものと推測される」(西村直子

『放牧と敷き草刈り』, → 7.4.2., p. 109)。このマントラは他の行作にも応用され、動物犠牲祭では腸間膜（大網）を取り出す際に用いられる。

2. 王の即位式でバター粥に用いられる「蒸籠」を作る材料に「自然に折れたインドボダイジュの枝から[作られた]容器が用いられる」(MS; 後の文献には異説もある)。(西村直子『文化』64, p.172)。
3. 祭火に用いる焚き木について、具体的言及があるか解らないが、斧で割るというような記述は無いものと思われる。古い時代の遺風とも考えられるが、2.のように、拾ってきたものを用いるとすれば、ここにも「樹木に対する慰撫」が見られるかも知れない。
4. 動物解体: 「ヴェーダの觀念に従えば、犠牲にされる馬の (Aśvamedha が問題になっている文脈) 身体が間接部位ごとに正しく解体されれば、身体部位は傷つけられたことにならないと考えられた」K. HOFFMANN, *Aufsätze* 346 n.5. (天界に正しく再生する。) → 21. RV I 162, 18.20.21。
5. バルヒス刈り: 「馬の肋骨によって barhiṣ を切るのは、草達を傷つける事がないようにである。…『下に[当たらない]ように、上に[当たらない]ように、[丁度]君の節に私が当たるように』と[唱える]。草達を傷つける事がないように (āhimsāyai) である。『君の切り取り手である私が傷つく事がないように』と[唱える]。Adhvaryu がそのように知らないで barhiṣ を刈る場合には、[刈る]分毎に、この者(祭主)の[来世の]ātman の[一部が]減少する。もし[祭主/Adhvaryu が]このように知っているならば、この者(祭主)の[来世の]ātman の[一部は]減少しない。『ここに、君は、barhiṣ よ、100の芽を持つ者として繁茂せよ』と[唱える]。他ならぬ草達の中に豊穰を定め置く事になる。『1000の芽を持つ者として我々は繁茂

したい』と[唱える]。他ならぬ[祭主の]祈願を言挙げすることになる」(MS, 西村『南』, p. 109)。「節」は動物の関節部と同単語である。

「放牧」

6. 植物の靈魂(?)。祭式 *yajñā-* は、献供される動物、植物、ソーマに対する殺害行為であり、贖罪を必要とする。プラーフマナ文献にある「ブリグの地獄巡り」(→ 22. 末尾)には、樹木、草などが復讐する情景とそれに対する贖罪法(改善儀礼)としての祭式が述べられる。ソーマ祭、犠牲際の最後に Veda の上の敷き草を祭火に投ずる(天界に赴かせる)儀礼にも注意。
7. 7種のバシユ(犠牲獣): 人, 馬, 牛, 羊, 山羊, 大麦, 米, → 7.2。
8. ŚB I 2,4,16 には、ヴェーディを掘り下げるときに、大地と生物たちを傷つけることに対する恐れが述べられている (SCHWAB, p. XX)。

17. 祭式と水

水の前で誓いをたて、契約を交わし、譲渡の確認をする、という風習については、普段あまり注意が払われていないように思われるのでもう一度指摘しておきたい:

OLDENBERG, H., *Religion des Veda*², 519 n.1: 手で水を触れて誓う、呪う: TS I 3,11,1 (AV XIX 44,9, ŚB III 8,5,10), Rāmāyaṇa VII 65,29f., 今日のインドの風習。

LÜDERS, H., *Varuna* I p.28ff. (地下の死者の水を考えている: p.34): [壺に入れた]水の前で (*apām ante*) 証言する ĀpŚrSū II 11,29,7: 水に懸けて誓う NārSmṛ I 239, AV XIX 44,8-9, IV 16: 水による神判 YājñSmṛ II 108f.: 養子縁組 ManuSmṛ IX 168: 贈り物をする時、受け手の掌か地面に水を注ぐ Jātaka VI 344,10ff. (*hatthe udakaṃ pātetvā*, 王が商人に村を譲渡), Bharhut 等のレリーフ (Jetavana の寄進のシーン), 碑文。

養子縁組の際の契約の水: LÜDERS 同書 668f., FALK, H., *ZDMG* 134 p. 119f., p. 124 (BaudhŚrSū, 王の灌頂と養子), SÖHNEN, R., *ZDMG-Suppl.* 7 p.

428 (Purāṇa), 更に KautArthaŚās III 7,15。

Gotō, T., *Erlanger Tagung* 159, n.39: 上掲の事項に加えて: 「水に触れて dakṣiṇā を受け取る」 MānŚrSū V 2,14,5 = VārGrhPariś Caturhotṛka 13: 贈与 GautDhSū I 5,16f., ĀpŚrSū II 4,9,8。Gotō は誓いの履行をどこにでもいて、連絡を取り合っている (cf. 水準), 生きた「水たち」(女性複数)が見張っているという観念を指摘した。破ると、罰として水神 Varuṇa による戒めの縛り縄 (pāśa-), つまり、水腫病が襲うのは、体内の水による復讐と考えられる。中世ヨーロッパの『ウンディーネ (水妖記)』の話も参考になる。

文献としてはさらに、HOPKINS, *JAOS* 52 (1932) 324-326, THIEME, *Stud.z.idg.Wortkunde* (1952) 53-55, SCHLERATH, *Königtum* (1960) 153ff., NARTEN, *Kl.Schr.* 186ff., OETTINGER, *StBoT* 22 (1976) 71ff.

18. 参考資料 1

アドゥリグ (Adhriḡu) の祝詞

動物犠牲祭において, Śamitar 「職人」(たち)による屠殺(窒息させる)に先立って, Hotar が大きな声で唱え Śamitar たちへ指示する祝詞 (praiśa)。リグヴェーダ (RV) には収録されていないが(散文!), AB 始めリグヴェーダ派の祭式文献に収録または言及される。ヤジュールヴェーダ (YV: Adhvaryu 祭官) では MS, KS, TB に収められている。ここでは, TB III 6,6 によった。いずれのテキストも RV に特徴的な形 (3. *udīcīnām asya*) を示し, RV-Hotar の家系に編集・伝承されたことを伺わせる。YV-Adhvaryu を中心に整備された祭式・祭式文献では屠殺・解体への言及は最低限に抑えられているが, Adhriḡu には犠牲祭のものと姿を伺わせるものがある。供犠の行程そのものはほぼ同一である。

1. 神々に属する職人たちよ, そして人間たちに属する [職人たち] よ, 捕まえよ。供犠の扉たちへと引き連れよ。両供犠の主(祭主と祭主夫人)へと供犠(強壯力を置き定めるもの: 犠牲獣) [の帰属を] を宣言しつづ。
2. 彼(犠牲獣)の為に祭火を捧げよ。敷き草(バルヒス)を敷き広げよ。この者を母は許可せよ。父は [許可せよ]。母胎を同じくする兄(弟)は [許可せよ]。牧を同じくする同僚は [許可せよ]。
3. [そうしたら: 殺したら] 北向きに足たちを据えよ。太陽に視力を赴かせよ。風へと氣息を放ちやれ。諸方位へと聴覚を。中空へと [彼の] 「実在」を。大地へと骨格を。¹
4. 一枚に彼の皮を引き剥がせ。臍に切れ目を入れる前に, 腸間膜(オソラク大綱)を引きちぎり出せ。温もりを内側に止めおけ(自分から遠ざけよ)。
5. 彼の胸郭を鷹と(の形に)成せ。両上腕を二つの大刀と。両下腕を二つの棒(矢柄)と。両肩

¹ Cf. RV X 16,3(火葬の歌)「視力は太陽に行け。呼吸(āmān-)は風に[行け]。天と地とに理法(秩序, dhárman-)に従って。或いは水達に行け, もしそこに君の定めがあるならば。草達の中に(において)骨格とともにしっかりと立て」。

(ヒッタイトの資料から)。ホメーロスに現れる川の畔での誓い, または, 地面に水を注いで, なければワインを用いて誓う風習にも注目。

ヒンドゥー儀礼, タントラ儀礼(仏教, ヒンドゥー)における灌頂 (abhiṣeka-), 寺院建立等の pratiṣṭhā 儀礼は, まさしく上に挙げた養子や土地譲渡のシーンに重なる。さらに, ヴェツサントラ王子が自分の二児と妻とを婆羅門に与える際, (相手の) 掌に水を注ぐことが語られ (Jātaka VII 547, 570), その情景がサンチー第一塔北門裏面に描かれている (MARSHALL-FOUCHER, *Sāñchī*, Plate ~~XXIII~~ XXIII)。同正面 (Plate XXIII) には同じジャータカ中に語られる白象と戦車との譲渡が, 水差しから水を注ぐ動作によって描かれている。この項, 森雅秀氏の教示による。

校正時追加:
H XXIX
F J

サンチーのレリーフの存在については,

を二つの亀のように。両臀部を切れ目のないものと。両腿を扉板と。両膝を二つの夾竹桃（の葉）と。²

6. 彼のあばら骨は 26 ある。³ それらを順次外し出せ。彼の各々の身体部位を無欠のものと成せ。
7. 捨てるべきもの（胃と胃腸の中身）⁴を隠す大地の〔穴〕を掘れ。
8. 毀損力（「羅刹」）に血を結合させよ。
9. 彼の大腸を傷つける事なかれ、[それを] 幅広いものと考えて、君たちの子種、子孫において、傷つける者が（現れて人・物を）傷つけることがないように、職人たちよ。⁵
10. アドゥリグ⁶よ（単数）、[君たちは] 努め励め。[君たちは] よく努め励め。[君たちは] 努め励め、アドゥリグ（単数）よ。
11. 「アドゥリグ」と「罪悪なき者」とは、両者は神々に属する職人である。そのような両者がこの〔犠牲〕 獣を、心得た者たちとして調理せよ（煮ろ）。彼の調理（煮ること）がそれぞれ [そうあるべき]、しかるべきやり方で。

19. 参考資料 2

アプリー讃歌 RV X 70 (896)

ヴェーダ祭式では、動物犠牲祭の 11 前献供に用いられる。⁷ リグヴェーダには各家系の計 10 伝承が収められている: I 13 (Kāṇva), I 142 (Aucathya), I 188 (Agastya), III 4 (Viśvāmītra), IX 5 (Kāśyapa), X 110 (Bhṛgu/Jamadagni), および Vasiṣṭha 系の VII 2 (Vasiṣṭha), II 3 (Śaunaka), V 5 (Atri), X 70 (Vadhryaśva)。RV 以後の祭式では X 110 (辻直四郎訳 p. 261ff.) に代表される。ここには別系統の X 70 を紹介する。āpṛī-「喜ばせて・満足させて自らの下へ引き入れる」(YS^{m+}) は新アヴェスタ語の āpṛī- に対応する。アヴェスタには Āfrīngān 「ā° たちの歌」(おそらく、様々な神を悦ばせる讃歌の歌集、程の意) という名の祭儀書があるが、伝承が悪く、あまり研究されていない (JUNKER, HERTEL による Ed, 訳, 研究あり)。検討の価値があるかと思われる。M. BOYCE, *A History of Zoroastrianism*, I 169 は Herodotus I 132 の報告するペルシャ人の祭儀⁸

² Text の読みの問題については A. SHARMA, *Beiträge* 92 参照。

³ 肋骨を 13 対もつのは、牛、羊（犬、猫も）。人は 12 対、馬 18 対、豚 14 対。

⁴ *ūvadhya-*: *ud-vadh* 「たたき出す、ひきちぎる」の Gerdv. から訛った語形と考えられる、*udv* > *ūv* については、語根の語頭音の明瞭化を伴う中期インド語形参照。

⁵ NARTEN *Sigm.Aor.* 226 + n. 684 参照。あるいは: 彼の幅広い大腸を傷つける事なかれ、君たちの子種、子孫において、傷つける者が傷つけることがないように、職人たちよ、[と] 考えて。

⁶ *ādhrigu-* < *á + dhr-i- (dhar) + gu-* (*gā* 「足を踏み出す、歩む」) 「人の支えを当てにしないでよい者」(?) :: アヴェスタ *drigu-*, *driyu-* 「貧しい、困窮した」(具体的には Ahura Mazda の庇護を必要とする者)。

⁷ 祭柱の歌、祭火を燃え立たせる讃歌 (*Sāmidheni*) は 11 詩節より成る。アプリー讃歌も 10 + 1 と考えられる (→ 15. 動物犠牲祭式次第, 前献供)。アドゥリグも 10 + 1 に整えられている。

⁸ ペルシア人が先に挙げた神々をまつる儀式の仕方は次のようである。ペルシア人は祭儀を行うに当たって、祭壇も設けず、火もたかない。また酒を注ぐ儀式もなく、笛も吹かず、花輪も着けず、ひきわりの大麦も用いない。どれかの神に供犠しようと思う時には、犠牲にする獣を清浄な場所へ曳いてゆき、冠の上にはいては桃金娘の葉をめぐらしてかぶり、その神の名を唱える。祭りをする者は、自分個人だけのために幸福を祈ることは許されず、ペルシア国民全体と国王の福祉を祈願する。自分もペルシア国民全体の内の一人だからである。犠牲獣を切り刻み肉を煮ると (cf. *Nirangistān* 63 [T.G.]), なるべく柔らかい草-たいていの場合クローバーを下に敷き、その上に肉を全部のせる。こういう準備が整うと、マゴスが一人そこへきて祈祷の呪文を唱える。彼らの話では、この呪文は神々の誕生を歌ったものであるという。いずれにせよ、神への供犠は、マゴスなしではせぬ慣わしである。それから暫時において、祭主は肉をさげ、後は自分の好きなように処理するのである (松平千秋訳)。先に述べた神々とは I 131 にある「天空全体 (ゼウス)、日、月、地、火、水、後になってさらに [アプロディテ] ウラニア、即ちミトラ (アナーヒター-の誤りとされる)」。

を Āfrīngān に述べられるような祭儀の姿と推定している。⁹

1. 私の この 焚木を、アグニよ、味わえ。
滋養の 足跡の上で、バターオイル滴る [匙] を迎え喜べ。
大地の 高まり (祭場) の上で、日々が 良き昼をもつことの為に、(→ III 8,3.5)
直立したものと成れ、強い精神力をもつ者よ、神々を祭ることに関して。
2. 神々の 先駆けとして、馳せ来たれ、
ナーラーシャンサ (男たちの賞讃) は、あらゆる姿 (毛色) をもった馬たちとともに¹⁰。
天理の道を通して 敬礼とともに、供犠 (強壯力を置き定めるもの) を、
最も神らしき者 (ナーラーシャンサ) は神々の為に調えるがよい。
3. 供物を伴った 人間たちは、アグニに、
最も継続的に 使者の用向きを為 呼びかける (*īdate*)。 ホトリ解除
最もよく運ぶ 馬たちによって、よく回転する 戦車によって、
神々を 運び来るがよい。ここに ホトリ [祭官] として座れ。
4. 開き広がれ、神々が味わう (喜ぶ) [バルヒス] は、水平に
長さにおいて長く、我々の為に 香りよくなれ。
怒らない 思考をもって、天の (*devā*¹¹) 敷き草 (バルヒス) よ、
意欲もつ (欲望する) インドラを最高位とする 神々を 祭るがよい。
5. あるいは、天の より広い 背に 触れよ、
あるいは、大地の 分いばいに 開け。
意欲を持ち (欲望しつつ)、扉たちよ、偉大さによって、偉大な者たち (神々) とともに。
天の (*devā*) 戦車を 止めよ、戦車を欲して¹²。
6. よき装身具を帯びた 天に属する 天の 両娘、
曙と夜とは 居場所に 座れ。
君たちの 広い 膝の上に、意欲もつ (欲望する) 両者よ、
意欲もつ (欲望する) 神々は、座り来たれ、よき恵みもつ両者よ。
7. 石臼は 直立し、アグニ (祭火) は高く燃え立たせられた。
好ましい (自分に属する) 定められた居所たちは アディティの 膝の上に¹³ [ある]。
両筆頭司祭は、両祭官よ、この 祭式において、
より知識ある者として 財 (動産) を 祭式によって齎せ。
8. 3 [女神]¹⁴ は、女神たちよ、この より広い 敷き草 (バルヒス) へと
座り来たれ。[それを我々は] 心地よくなした。

⁹ アヴェスタには Nīrangistān という名の祭儀規定書がある (Ed. + 訳: WAAG, KOTWAL-KREYENBROECK)。敷き草、焚木、水、祭場、献供物、犠牲獣、Haoma などへの言及があり、ヴェーダ祭式を想起させるが、伝承も悪く断片的情報しか得られない。インド側に見られる yajus、祭官職などはインドイラン共通時代に遡ると推測される根拠がある。

¹⁰ つまり、戦車に乗って。

¹¹ *deva barhiṣ*: *devā*- は普通「神」を意味するが、ここでは、第5詩節の *devām rātham* におけると同様、本来の「天 (*dyāv-/div-*) に存する・属する、天における」の意味が残っている (他にもこの用法あり)。

¹² *rathayūr*: あるいは「車番として」(?)。

¹³ *ādīter upāsthe* → 1.5. アディティとアーディテヤ。

¹⁴ X 110,8 では: *bhāratī*-, *īdā*-, *sārasvatī*-。

マヌ (Manuṣ) [の時] のように、祭式を、よく定め置かれた 供物たちを、
-女神 イダーは 足跡にバターオイルをもつ¹⁵ - 味わえ¹⁶。

9. 巧業の神 (トゥヴァシュトリ) よ、好ましいことを 君が達成したからには、
アンギラスたちの 連れ (共に現れる者) と 君は成ったのだから、
そこで (sá) 神々の 管轄の下へと、予め知る者として、
意欲もって [犠牲獣を] 祭り届けるがよい、財 (動産) を与える者よ、よく宝もつ者として。
10. 樹 (木々の主) よ、綱によって 縛り付けて、
神々の 管轄の下へと [犠牲獣を] 運び届けるがよい、知る者として。
神は [犠牲獣を] 美味しくするがよい、供物たちと 為すがよい。
天と大地とは 私の 呼び招きを 支援せよ。
11. アグニよ、ヴァルウナを 運び来たれ、我々を前進させる為に、
インドラを 天から、マルットウたちを 中空から。
全ての 祭りに相応しい者たちは 敷き草 (バルヒス) へと 座り来たれ。
スヴァーハー、不死の 神々は 自らを酔わせよ。

20. 参考資料 3

祭柱 (sváru-) の歌 RV III 8 (242)

祭柱は祭式文献では *yúpa-* と呼ばれる。この語は RV にもあるが、扉の柱の意味でも用いられる。*sváru-* の語は祭式文献では祭柱の削りかすの意味で用いられる。削りかすは犠牲祭の末尾で祭火に献ぜられるが、祭柱を象徴し、往時、祭柱を祭火に投じた名残と解釈されることもある (SCHWAB)。

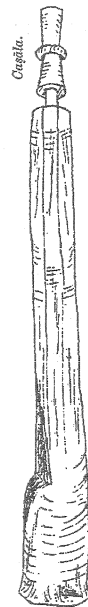


FIG. 100.

左 : STAAL, *Agni I*, p. 595 アグニチャヤナにおける祭柱の建立。

右 : RAGHU VIRA, *JRAS* 1934, p. 305, 祭柱の図。

¹⁵ Cf. 大洪水の後、Manu の献供から生まれた娘について同じ表現が謂われる (ŚB I 8,1,7)。

¹⁶ *juṣanta*: cf. K.HOFFMANN *Inj.* 264.

1. 神々を崇める人々は 君を 祭儀において、
樹（木々の主）よ、神々に属する 蜜（バターオイル）によって塗る。
君が直立することになる時、ここに財（動産たち）を 置き定めよ、
あるいは、この 母（大地）の 膝の上に 君が安住することになる時。
2. 燃え立たせられた [祭火] の 前（東）に 身を寄せながら、
老いることのない、勇者たちに富む 言葉の靈力を 勝ち得ながら、
我々から 遠くへ 逼迫を 押し止めながら、
立て、大いなる 恵み豊かな状態の為に（を齋すべく）。
3. 立て、樹よ、
大地の高まり（祭場）の上に。（→ X 70,1）
良く打ち込まれながら、
祭式を荷とする者（祭火？）に 靈験を定めおけ。
4. 若い [祭柱は] 良く衣を纏い、巻き包まれて やって来た。
彼は、また、（祭柱として）生まれる時、一層華やかになる。
彼を 思慮ある 見者たちは 立て起こす、
良く思いめぐらし [てものを手に入れる]、神々を崇める [見者たちは]、思考を用いて。
5. （樹として）生まれた [彼] は（祭柱として）生まれる、日々が 良き昼をもつことの為に¹⁷。
集会の場で、分配において、増大しつつ。
思慮ある、働きある者たちは、計画をもって [彼を] 清める。
神々の下へ通う¹⁸（靈感に）震える者は 言葉を発する。
6. 君たちの中、神々を崇める男たちが 打ち込んだ、
樹よ、あるいは、斧が 削り整えた者たち、
彼ら、祭柱たちは、神々として 立ったまま、
子孫に富んだ 宝を、我々に 置き定めたいと思え。
7. 地の上で 伐られ、
打ち込まれ、匙が（その上で）留められた（バターオイルを注がれた）者たち、
彼らは、我々の 望みの物を 追い求めよ、
神々の下で、安住を成就させる者たちとして。
8. アーディテヤたち、ルドウラたち、ヴァスウたち、良き導きをもつ者たち、
天と地と、大地、中空、
神々は、好みを一つにして 祭式を 支援せよ。
祭儀の印を 直立させよ。
9. 列を成す 雁たちのように 位置を占め、
白く輝いて 身を纏い、祭柱たちは、我々の下へ やって来た。
見者たちによって 前（東）に 立て起こされながら、
神々として、神々の 管轄の下へと 入る。
10. 角ある [獣] たちの 角たちのように さえ 見えている、

¹⁷ *sudinatvé áhnām* : cf. T. Goṭō, Vasiṣṭha und Varuṇa, *Erlanger Tagung*, 154, n. 23.

¹⁸ あるいは：「神々に求める」。

祭柱は、大地の上で、柱頭（「鼻頭」、猪の鼻と同一語、祭柱の上にかぶせられる）を伴って。
（競合する）詩人たちとの呼び掛け合いにおいて、あるいは、聴き従いながら、
我々を援助せよ、争いへの馳せ参じたちにおいて。

11. 樹よ、100の枝芽をもって茂れ、
- 1000の枝芽をもって、我々は茂りたい -
その君を、この斧が、尖らせながら、
齋した時、大いなる恵み豊かな状態の為に（を齋すべく）。

21. 参考資料 4

馬の犠牲祭の歌 RV I 162

RVにおける動物犠牲祭の実態は「アシュヴァメダの歌」（I 162, 163）から想像される程度である。ここでは、I 162を紹介する。I 163は朝日と馬とを同一化する神秘的解釈の歌である。

1. 我々を Mitra は、Varuṇa は、Aryaman は、Āyu は、
Indra は R̥bhū たちの支配者は、Marut たちは見逃すな、
神々のもとで生まれた、競走に勝つ、[戦車を] 牽く馬の
勲たちを、集会（分配の場）において [我々が] 公言するであろう時に。
2. 飾りによって、財産（遺産）によって包まれた [馬]¹⁹ への
贈与を、[縄に] 捕らえて²⁰、先に立てて、[人々が] 連れてゆくとき、
[その] あらゆる毛色を備えた雄山羊は、[メエメエ] 啼きながら、真直ぐ前へと、
Indra と Pūṣaṇ 固有の庇護（または：領域）の中へと入り行く。
3. あらゆる神々に属する雄山羊は、[今] ここに、競争に勝つ馬と共に、
Pūṣaṇ への配分として、先立てて導かれている。
喜ばしい、前もつての捧げ物を、競走馬と共に [人々が導く] とき、
Tvāṣṭar²¹ が当の者を、良き名声を得る行為へと活気付ける。
4. 供物となる馬を、適時に合わせて、神々の道へと
Manu の子孫たちが、[祭場の周りを?] 三度、巡り導くとき、
この時、Pūṣaṇ の第一の（または：最新の）分け前として行く、
祭式を神々に告げ知らせながら、雄山羊は。
5. Hotar は、Adhvaryu は、関与する者たち、[即ち] 祭火を点火する者、
[ソーマの压榨] 石をもつ者は、そして、すこぶる [靈感に] 震える讃称者は²²、

¹⁹ 馬を貴重なものによって盛装させたものであろう。rēkṇas-「遺産」は犠牲を予定した表現か。

²⁰ 盛装した馬への贈り物として、山羊が先導される。死後生まれる天界での税とも考えられる、cf. 阪本純子、今西記念論集 875f.

²¹ トヴァシュトリ Tvāṣṭar- は通常工芸、技術の神であるが、ここには、「肉を切り分ける、肉片を形作る」という本来の意味が残っている可能性がある。印欧祖語に遡る技術用語は多くないが、この基にある動詞はそのようなものの一つである。

²² ホートリ、アドヴァリユを除いてシユラウタ祭式の祭官組織に知られない。agnim-indhā- はシユラウタ祭の Āgnīdhra (Agnidh)「点火祭官」に当たるものと思われる。Śaṁstar「讃える人」には sastra- を唱える者（シユラウタ祭ではホートリ）が考えられるが、注釈者サーヤナが言うように、ホートリの助手に当たるマイトラヴァルナ (Prašāstár-) の可能性がある。あるいは Sāmaveda 祭官（の原形）を示唆するかもしれない。

この、よく設えられた、よく祭られた

祭式によって、[それぞれの]腹を満たせ。

6. 祭柱を伐採する者たちと、そして祭柱を運ぶ者である者たち、
柱頭 (*caṣāla-*, → 20.: III 8,10) を、馬の祭柱のために刻み仕上げる者たち、
そして、競走馬のために調理具一式を準備する者たち、
そしてまた、彼等の歌い迎え (囃し言葉) たちが我々を駆り立てよ。
7. [馬は] 近づき踏み出した - 同時に、私の考え (詩) は置き定められた -
神々の領域へと、背をのばした [この馬] は。
当の者を、[靈感に] 震える聖仙たちは喜び囃す。
我々は榮えの中に、[この者を] 神々の良き係累持つ者となし遂せた。
8. 競走に勝つ競走馬の (固定、拘束用) 綱、(前後の脚を固定する) 縛り綱なるもの、
彼の頭絡 (おもがい)、(車体に結ぶ?, 緬った) 綱なるもの、
或いはまた、つまり、当の者の口の中にもたらされた草なるもの、
君のそれら全ては、神々の中へとあれ。
9. 馬の生肉の [一部を] 蠅 (*mākṣikā-*) が食べたならば、
或いは祭柱 (*svāru-*)²³ に、斧に付着しているものがあれば、
職人の両手に [付着している] もの、爪たちに [付着している] もの、
君のそれら全ては、神々の中へとあれ。
10. 臍物の中味 (*ūvadhya-*, n.) が発散するもの、
火の通っていない生肉の臭いがあれば、
その際、職人たちは、良き仕事たちを為せ。
そして [犠牲の] 供物 (*médha-*, m.) を、煮えたものへと調理せよ。
11. 串へと打ち込まれた君の肢体 (*gātra-*) から、
火 (Agni) によって調理されている時、流れ落ちるものがあれば、
それは大地の上に付くな。[乾し] 草たちの上に [付く] な。
それは、欲しがっている神々へ贈られたものであれ。
12. 競走に勝つ [馬] が調理されたのを見て取る者たち、
それを、「良い香りがする。取り出せ」と言う者たち、
そして競走馬の、肉乞いを控えて [待つ] いる者たち、
そしてまた、彼等の囃したては我々を駆り立てよ。
13. 肉を調理する火鉢 (*ukhā-*) の覗き穴 (験し申のことか) なるもの、
肉汁 (*yūṣ-*) を流し入れる鉢たちなるもの、
粥鍋たちの湯気の立つ蓋たち、
鉤たち、(肉を容れる) 籠たちは、馬の周りに控えている (を飾っている)。
14. 踏みしめ、しゃがみ込み、向き変え²⁴,

²³ 後代には祭柱 (*yūpa-*) を仕上げる際に出る削りかす、鉋屑を意味する。祭柱に肉片が付きうるとすれば、祭柱の脇で屠殺したものと想像される。シュラウタ祭においては、祭場の北側の「職人」の小屋に移動して行われる (→ 15., 第3部)。ヴェーディの形も解体した獣の形に似ている。

²⁴ 馬の調教に関わる用語と思われる (調教場・施設か)。馬に関わる用具 (・施設) 一式を天界へ送り込むことを謂うものであろう。

そして、競走馬の足かせ (*pádbīṣa-*) なるもの、
 そして、飲んだもの、そして、飼料として食べたもの、
 君のそれら全ては、神々の中へとにあれ。

15. 君を、煙の匂いがする火 (*Agni*) はくすぶらせるな。
 白く輝いている火鉢 (→ 13) が、飛び散って溢れるな。
 讃えられた (祭礼を受けた), [一年間] 後をつけられた,²⁵ [そして今] 歌い迎えられた, *vaṣat*
 の発声を受けた (献供された)²⁶
 その馬を、神々は受け取る。
16. 馬のために、[人々が] 敷き広げる着物なるもの、
 上掛け、当の者のために [敷き添える] 黄金 (金銀) たち、
 (前後の脚を固定する) 縛り綱、足枷 (*pádvīṣa-*)、(すなわち) 彼に属する物 (*priya-*) たちに
 競争馬を、
 神々の中へと、[人々は] 率いてゆかせる。
17. 人がもし、「シュー」と掛け声を掛けられた君に跨る際²⁷、力いっぱい、
 踵によって、或いは鞭によって駆り立てたことがあれば、
 (諸々の) 祭式執行において、柄杓によって、それらの供物たち [にするように]、
 君に属するそれら全てを、[私は] *bráhmaṇ-* (霊験ある言葉) によって整える。
18. 神々を係累にもつ、競争に勝つ馬の、34 の
 肋骨たち²⁸ に斧 (腑分け包丁 *svádhitī-*) は当たる。
 肢体たちを途切れのないものと [君たちは] なし、準繩 (規矩, *vayúna-*) たちを [作れ]。
 関節ごとに、順次声をかけてから、切り分けよ。²⁹
19. *Tvaṣṭar* に属する馬を切り分ける者は一人である。
 支えている者は二人用いられる。そのように正しい手順がある。
 君の肢体の中から、私が正しい順番に作るところの、
 それぞれを、(肉の) 塊たちの中から、[私は] 祭火の中に献供する。³⁰
20. 君自身の *ātman* は、帰入する (死ぬ) とき、君を苦しめるのをやめよ。
 斧 (腑分け包丁 *svádhitī-*) は君のからだに [何も] 手をつけるな。
 せっかちな、切り分け手とはいえない [職人] が、[手順を] 飛び越して、
 君の肢体を、刀物によって、誤って途切れたものとなすな。
21. 君は、この際、また、死にはしないのだ。君は傷つかない。
 神々へとこそ、君は行く、通りやすい道たちを通して。

²⁵ シュラウタ祭の *Aśvamedha* では、犠牲にされる馬は一年間放たれ、その後を武人たちがついて行き、馬の歩いた跡を領土として宣言する。

²⁶ Cf. 堂山英次郎, 印度学仏教学研究 52 (2004) 63.

²⁷ 明らかに乗馬が意図されている。

²⁸ 馬の肋骨 (*vāṅkri-*) は 18 対、36 本ある (AB に正しく述べられている)。うち一対を鎖骨と考えるなどして、肋骨と数えないものか。この *Akk.* は「目的地」。ここでは、左右肋骨間 34 箇所を斧が正しく達することを謂うものとも考えられる。

²⁹ AB, *ŚāṅkhŚS* 両版の *Śunaḥśepa* 物語に見られる, *śas* 「切る」と *śās* 「命ずる」の混同を理解する際に参照するべきである。

³⁰ ホートリ祭官が献供していることに注意。

(Indra の) 灰黄色の二頭の馬, (Marut たちの) 二頭の斑牛 (あるいは: 馬) は, 君の
 軛仲間となった。

勝利する馬は, (Aśvin の) 驢馬の人字型軛に, [今まさに] 身を置いた。

22. よい牛の [財産] を, よい馬の [財産] を, 我々に, 勝利する馬は,
 男たちを, 息子たちを, そして, あらゆる者たちを繁栄させる財産を [与えよ]。

Aḍiti は, 我々に, 過失なきことをもたらせ。

我々の [ために] 支配権を, 供物を伴う馬は獲得せよ。

22. 参考資料 5

祭式による殺害とその贖罪：プーリグ Bhr̥gu の他界歴訪 ŚB XI 6,1

アグニホートラという, 毎晩と毎朝, 二度ずつ熱した乳を祭火に献ずる儀式によって, 人 (祭官) が祭式によって植物動物たちに加える殺害行為を乗り越え, アグニホートラの各行作に対応する果報が (おそらく死後天界で, および, 次生で) 得られることを教える挿話。JB I 42-44 に平行ヴァージョンがある。Cf. 伏見誠, インド思想史研究 9 (1997) 61-77。

1. ヴァルウナの子, プーリグは父ヴァルウナを学識において凌ぐと思っていた。そのことをヴァルウナは知った, 「彼は私を学識において凌ぐと思っている」と。
2. 彼は言った, 「東へ向いて, 坊や, [今から] さまよい行け。そこで見られるもの, それを見たら, 南へさまよい行け。そこで見られるもの, それを見たら, 西向きにさまよい行け。そこで見られるもの, それを見たら, 北向きにさまよい行け。そこで見られるもの, それを見たら, この東側の二 [中間方角, 「維」] の中の北側の中間方角 (維) へとさまよい行け。そこで見られるもの, それを私に語るように (Opt.)」と。
3. 彼は, すぐに (ほかならぬそこから) 東へ向いてさまよい出た。なんとまた, 人たちが人たちを相手に, 彼らの関節たちを関節毎に, すっかり切り刻んでは, 関節毎に分け合っているのに [出くわした], 「これは君のだ, これは私のだ」と。彼は言った, 「恐ろしいことだ, 何と, 君 (おおい), 人たちをここにこうして人たちが, 彼らの関節たちを関節毎に, すっかり切り刻んでは, 関節毎に分け合っていたなんて」。彼らは言った, 「このように, この者たちは私たちをあの世界において扱った (つきまとった) のだ。彼らを私たちが, こうして今, お返しに扱う (つきまとう) つもりだ」と。彼は言った, 「これについて贖罪法があるか。」「あーる。(asti アクセントなし)」「どんな。」「君の父こそが知っている。」
4. 彼は, すぐに (ほかならぬそこから) 南へさまよい出た。なんとまた, 人たちが人たちを相手に, 彼らの関節たちを関節毎に, すっかり切り離しては, 関節毎に分け合っているのに [出くわした], 「これは君のだ, これは私のだ」と。彼は言った, 「恐ろしいことだ, 何と, 君 (おおい), 人たちをここにこうして人たちが, 彼らの関節たちを関節毎にすっかり切り離しては, 関節毎に分け合っていたなんて」。彼らは言った, 「このように, この者たちは私たちをあの世界において扱った (つきまとった) のだ。彼らを私たちが, こうして今, お返しに扱う (つきまとう) つもりだ」と。彼は言った, 「これについて贖罪法があるか。」「あーる。」「どんな。」「君の父が知っている。」
5. 彼は, すぐに (ほかならぬそこから) 西へ向いてさまよい出た。なんとまた, 人たちによって人たちが, 黙って座っているところを, 黙って座っている (彼ら) によって, 食べられているのに [出会った]。彼は言った, 「恐ろしいことだ, 何と, 君 (おおい), 人たちをここにこうして人たちが,

黙って座っているのを黙って座りながら食べているなんて」。彼らは言った、「このように、この者たちは私たちをあの世界において扱った（つきまとった）のだ。彼らを私たちが、こうして今、お返しに扱う（つきまとう）つもりだ」と。彼は言った、「これについて贖罪法があるか。」「あーる。」「どんな。」「君の父が知っている。」

6. 彼は、すぐに（ほかならぬそこから）北へ向いてさまよい出た。なんとまた、人たちによって人たちが、悲鳴をあげているところを、悲鳴をあげている（彼ら）によって、食べられているのに[出会った]。彼は言った、「恐ろしいことだ、何と、君（おおい）、人たちをここにこうして人たちが、悲鳴をあげているのを悲鳴をあげながら食べているなんて」。彼らは言った、「このように、この者たちは私たちをあの世界において扱った（つきまとった）のだ。彼らを私たちが、こうして今、お返しに扱う（つきまとう）つもりだ」と。彼は言った、「これについて贖罪法があるか。」「あーる。」「どんな。」「君の父が知っている。」

7. 彼は、すぐに（ほかならぬそこから）、この東側の二[中間方角、「維」]の中の北側の中間方角（維）へとさまよい出た。なんとまた、女が二人、美しい[女]と美しすぎる[女]とが[いる]のに[出会った]。二人の間には、黒い男が、赤茶色の目をして、棒を手にして立っていた。この者を見ると、彼を恐怖が捕らえた（見出しした）。彼は戻ってきて[家に]落ち着いた。彼に父が言った、「自習をせよ。何故に、いったい（今）、自習をしないのか」と。彼（プフリグ）は言った、「何を学ぶのでしょうか。何も[学ぶものが]ありません。」その際、ヴァルウナは知っていた、[彼が]見たのだ(*adrāvāi*)、ということ。

8. 彼は言った、「おまえが、あの時、東の方角で、人たちが人たちを相手に、彼らの関節たちを関節毎に、すっかり切り刻んでは、関節毎に分け合っているのを見た(*adrākṣīs*)、『これは君のだ、これは私のだ』と、その彼らは樹木たちだった(*abhūvan*)のだ。ひとが樹木たちの焚木をくべるならば、そのことによって樹木たちを確保する、そのことによって樹木たちの世界を勝ち得る。

9. 次に、おまえが、この際、南の方角で、人たちが人たちを相手に、彼らの関節たちを関節毎ごとに、すっかり切り離しては、関節毎に分け合っているのを見た(*adrākṣīs*)、『これは君のだ、これは私のだ』と、その彼らは家畜たちだった(*abhūvan*)のだ。ひとがミルクを用いて献供を為すならば、そのことによって家畜たちを確保する、そのことによって家畜たちの世界を勝ち得る。

10. 次に、おまえが、この際、西の方角で、人たちによって人たちが、黙って座っているところを、黙って座っている[彼ら]によって、食べられているのを見た(*adrākṣīs*)、その彼らは草たちだった(*ābhūt*)のだ。ひとが干し草を用いて[火でミルクを]照らすならば、そのことによって草たちを確保する、そのことによって草たちの世界を勝ち得る。

11. 次に、おまえが、この際、北の方角で、人たちによって人たちが、悲鳴をあげているところを、悲鳴をあげている[彼ら]によって、食べられているところを見たが、彼らは水たちであったのだ。ひとが水たちを[沸騰しているミルクに]注し静めるならば、そのことによって水たちを確保する、そのことによって水たちの世界を勝ち得る。

12. 次に、おまえが美しい[女]と美しすぎる[女]と、これら二人の女たちを見た(*adrākṣīs*)とき、その美しい[女]、それは信である。人が一回目の献供を献ずるならば、そのことによって信を確保する、そのことによって信を勝ち得る。次に、美しすぎる[女]、それは不信である。人が二回目の献供を献ずるならば、そのことによって不信を確保する、そのことによって不信を勝ち得る。

13. 次に、その両者の間に黒い男が赤茶色の目をして棒を手にして立っていた(*āsthāt*)のは、それは怒りであった(*ābhūt*)のだ。ひとが *srūc*-[大祭匙、スプーン]に水たちを汲んで注ぎ入れるならば、

そのことによって怒りを確保する，そのことによって怒りを勝ち得る。人がもしこのように知ってアグニホートラを献ずるならば，そのことによって一切を勝ち得る，一切を確保する。

(参考) ŚB II 2,2,1 = IV 3,4,1 = XI 2,2,1

彼らはこのことによって祭式 (*yajñá-*) を打ち殺すのだ，当のもの (祭式) を繰り広げる時には。まさしく王 (ソーマ) に圧搾をかける時には，その際，彼 (ソーマ) を打ち殺す。犠牲獣を同意せしめる (屠殺する)，解体を指示する時には，その際，彼 (犠牲獣) を打ち殺す。臼と杵とによって，挽き臼によって，彼らは穀物祭式を打ち殺す。

Cf. TS VI 6,7,1, LUDWIG, RV, IV 214f., SCHWAB, p. XVI (: *annaṃ devānām* と関連箇所，文献)。

[付記] 本報告は，2002年6月1日，東北芸術工科大学 (山形市) で開催された久保田力教授主催による印度学宗教学会シンポジウム「儀礼・祭式の比較文化論」における発表レジメを基礎にした。シュラウタ祭の動物犠牲祭に重点を置いた報告となっているのは，当日のテーマに合わせた骨組みが残っているためである。今回，阪本 (後藤) 純子の助力を得て，大幅に改訂増補した。本年7月には，本報告を基に，タントラ儀礼への展開に関わる部分に焦点を絞り，島岩教授主催の科研プロジェクト「中世ヒンドウイズムにおけるバクティ運動の歴史的展開」において発表し，参加諸兄から意見を伺う予定であった。島先生から最後に戴いたメールは5月9日付けであったが，その3日後に突然の訃報に接することとなった。公明真摯な生き方を明朗に貫かれ，インド学の意味を広く一般に語りかけうる稀有な学者であっただけに無念ではない。島さんへの思慕の念を，最後に書き留めさせていただきたい。(2007年5月24日)

総合人間学叢書 既刊・近刊案内

- 第1巻 2006年7月刊 ISBN 4-87297-941-9
 第2巻 2007年3月刊 ISBN 978-4-87297-925-1
 第3巻 2008年1月刊 ISBN 978-4-87297-987-9
 第4巻 2008年3月刊 ISBN 978-4-87297-988-6

Generalized Science of Humanity Series Vol. 3

総合人間学叢書 第3巻

編集委員：中谷英明（委員長・AA研） 宮崎恒二（AA研）
 大塚和夫（AA研） 峰岸真琴（AA研）
 Christian DANIELS（AA研） 日高敏隆（総合地球環境学研究所）
 内山勝利（京都大学） 内堀基光（放送大学）
 丘山新（東京大学）
 Maurice AYMARD（パリ人間科学館（仏））
 Michael WITZEL（ハーヴァード大学）

発行：東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所
 共同研究プロジェクト「総合人間学の構築」
 〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
 電話 042-330-5600 Fax. 042-330-5610

発行日：2008年1月発行 *(印刷会社ロジックにて一部送付済：25.3.2008着)*

印刷：日本ルート印刷出版株式会社
 〒135-0007 東京都江東区新大橋1-5-4 永谷ビル1F

ISBN 978-4-87297-987-9

